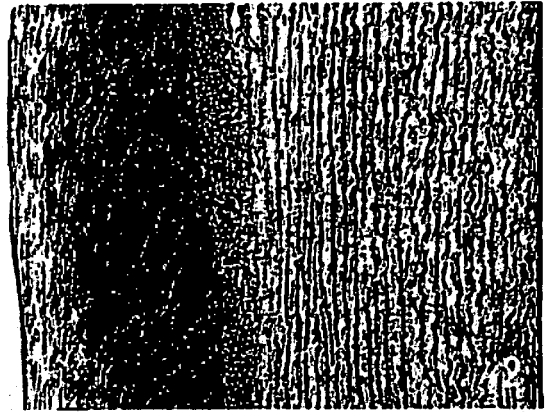


猿の粥状動脈硬化症

鹿児島大学農学部家畜病理学教室出題

第9回獣医病理学研修会 標本 No. 121



日本猿，牡，約37才，高隈山産で約2才の時から鹿児島市鴨池動物園で飼育されていたもので，全国動物園中最長寿の記録を持ち，オクマサンの名称で親まれてきた猿である。老令なため飼育には特に注意がはらわれていたが，43年7月下旬元気食欲不振となり倒れ，触診で左頰部に拇指頭大の柔かい腫瘤，又右胸部に径5cm，厚さ5cmの稍々硬固な腫瘤を認めた。老衰と考え，食餌に注意して加療を続けたが同年8月2日斃死した。

栄養状態は良好で，剥皮するに多量の脂肪の沈着を認め，又腹腔内大網膜及び腸間膜にも多量の脂肪が沈着している。右胸部及び左頰部の腫瘤は皮下に存在するLipomaである。肝は暗赤色で光沢に乏しく，腎は暗褐色，皮質，髓質の境界は稍々不明瞭，肺は肺炎腫及びAnthracosisを認め，心には左右両心室に血餅及び豚脂様凝塊が存し，脾は稍々萎縮している。心臓起始部附近から後大動脈の内面は粗糙で白色の線条或は斑状の隆起部がみられ，これらの病変は腹大動脈部において特に顕著である。写真(1)は，この隆起部のH-E染色による組織像であるが，内膜の顕著な肥厚が認められ結合織の増殖と

水腫がみられ，中膜には変性，壊死部が散在的に認められる。この壊死部はPAS染色でPAS陽性物質を含む。写真(2)はSudan III染色で内膜肥厚部に橙赤色及び赤色に染まる脂質の沈着がみられる。(写真では黒色部である。)これは軽度ながらも肥厚部以外の内膜にも及ぶ。エラスチカ・ワンギーソン染色(写真3)で肥厚部においては幾分弾性線維の増殖がみられ，内膜下の中膜においては写真のように弾性線維の崩壊，消失がみられ，この崩壊部周囲には結合織の増殖が認められる。この動脈の病変は粥状(アテローム)硬化症と診断される。その他，中動脈においても内弾性板の断裂，崩壊，消失，中膜弾性線維の消失がみられる。又心冠動脈，腎の細動脈においても弾性線維の増殖を伴う内膜の肥厚がみられた。これ等の血管病変は何れも老令の変化と考えられよう。

元來動脈硬化症は粥状硬化症，中膜硬化症，細動脈硬化症が知られている。粥状硬化症及び細動脈硬化症は人によくみられ，人以外の動物の硬化症は中膜硬化症が良く知られている。このような粥状硬化症の猿における自然発生例は極めて珍しいものと考えられる。